

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12842

研究課題名（和文）戦間期ドイツ語圏のオペレッタにおける政治社会諷刺の表現と機能をめぐる多角的研究

研究課題名（英文）A Multifaceted Study of the Expressions and Functions of Socio-Political Satires in Operettas in German-Speaking Areas during the Interwar Period

研究代表者

小川 佐和子（OGAWA, SAWAKO）

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：90705435

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1920年代から1930年代のドイツ語圏において圧倒的な人気を誇った大衆娯楽であるオペレッタについて、次の3つの観点から社会的意義を問い直した。まず、オペレッタにみられる社会・政治諷刺における創作側と聴衆側の相互作用、次にオペレッタから演劇や映画等へのジャンルを超えた影響、そしてドイツ語圏内・圏外での国境を越えた人材的・芸術的・技術的交流の影響である。以上の観点から現存資料の調査を行い、社会的・政治的・文化的パロディに満ちたオペレッタが激動の戦間期においてどのように諷刺を機能させていたのかという問いのもと、大衆の代弁者としてオペレッタが果たした役割を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究をつうじて、生きた舞台上で機能する諷刺によってオペレッタ作品がどのように自己反省的に作り変えられてきたのかを明らかにした。従来の文化史研究で看過されてきたオペレッタを多角的に見つめなおすことにより、ドイツ語圏オペレッタにおけるモダニズムの諸相に光を当てることができた。本研究の学術的意義は、戦間期のドイツ語圏オペレッタの特質を検証し定位することにより、ワイマール文化研究やユダヤ文化研究のみならず、文化史一般に新たな分析と評価の契機を提供することにあった。得られた研究成果は、論文や実際のオペレッタ公演のプログラム解説として出版し、広く研究者の便宜に供するとともに、一般の方々にも還元した。

研究成果の概要（英文）：This study examines the social significance of operetta, the overwhelmingly popular form of popular entertainment in the German-speaking world in the 1920s and 1930s, from the following three perspectives. Firstly, the interaction between creator and audience in social and political satire in operetta, secondly, the cross-genre influence of operetta on theatre and film, and thirdly, the influence of transnational personnel, artistic and technical exchange within and beyond the German-speaking world. From these perspectives, a survey of extant material was conducted to elucidate the role played by operetta as a voice for the masses under the question of how operetta, full of social, political and cultural parody, functioned as satire in the turbulent interwar period.

研究分野：文化史

キーワード：オペレッタ 諷刺 戦間期 亡命ユダヤ人 モダニズム 映画 ワイマール 喜歌劇

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、1920-30年代をオペレッタ第三の時代と位置付け、オペレッタの「モダニズム」の全容を明らかにしていく。オペレッタの歴史は、まず19世紀半ばのパリにおけるジャック・オッフエンバックに始まり、続いてウィーンにおけるヨハン・シュトラウスII世らに代表される「金」の時代が到来する。次に、20世紀初頭-20年代にかけて東欧出身の作曲家がウィーンやベルリンで活躍し、「銀」の時代といわれる第二次オペレッタ・ブームをもたらす。それに続く1920-30年代は、レビューやジャズ、映画といった、新興の大衆娯楽やアメリカ文化がオペレッタに導入され、新たに展開していく「脱古典期/モダニズム期」である。だが、この第三の時代は、「銀」の時代の付随と捉えられ(Richard Traubner, *Operetta: A Theatrical History*, Routledge, 2003)、この時期を概観する基礎的研究はいまだ確立されていない。オペレッタのパイオニア的研究書(Volker Klotz, *Operette*, Bärenreiter, 2004)においても事例が少ない。これが本研究を必要とする学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究の三つの柱は、(1) オペレッタにみられる社会・政治諷刺における創作側と聴衆側の相互作用、(2) オペレッタから演劇や映画等へのジャンルを超えた影響、(3) ドイツ語圏内・圏外での国境を越えた人材的・芸術的・技術的交流の影響、である。以上を究明し、1920-30年代のドイツ語圏オペレッタにおける「モダニズム」の諸相を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

それぞれの研究方法を下記に説明する。

(1) オペレッタにみられる社会・政治諷刺における創作側と聴衆側の相互作用

本主題では、オペレッタの機能である「諷刺」と「パロディ」をめぐる理論的枠組を明確にする。リンダ・ハッチオンやミハイル・バフチンの理論研究やゲオルク・ジンメル为社会学的方法論を参考にし、オペレッタにおいて大衆が権力・権威を反転させる物語構造や男性社会に異議申し立てをする女性キャラクターの機能、古典をパロディ化する自己反省的作用を検討する。オペレッタにおける喜劇役者の「笑い」と「アイロニー」の役割については、アンリ・ベルクソンやウラディミール・ジャンケレヴィッチを参考に解明する。以上の理論的枠組を踏まえた上で、上演時の時代背景や各劇場の伝統、各都市の演劇的状况を調査し、個々のオペレッタで描かれた諷刺の意味を精査するとともに、ナチス台頭以降、そうした諷刺演出がどのような制約を受けざるを得なかったのかを考察する。

(2) オペレッタから演劇や映画等へのジャンルを超えた影響

歌と芝居と舞踊から成るオペレッタは、ジャンルそれ自体が領域越境的な性格を持つ。すなわち、演劇・オペラ・映画・バレエといった隣接する視聴覚表象・身体文化との相互交流がきわめて盛んな大衆娯楽ジャンルである。さらにカール・クラウスやジークフリート・クラウアー、クルト・ヴァイル、ゲオルク・カイザーといった批評家や創作者がオペレッタに多大な関心を寄せていたように、オペレッタには「高級文化/大衆文化」および「モダニズム/大衆娯楽」の分断を崩すような豊かな相関関係が見出される。本主題では、舞台芸術・視聴覚文化

の研究分野において、散発的に遂行されてきたオペレッタに関わる研究成果を取り入れ、オペレッタのジャンル横断的な創造の協働性を明らかにすることを目指す。

(3) ドイツ語圏内・圏外での国境を越えた人材的・芸術的・技術的交流の影響

オペレッタはジャンル越境のみならず、国際的な広がりも活況を呈していた。オペレッタの国際的展開については、ドイツ語圏のみならず、フランス、イギリス、アメリカ、さらに日本へと幅広い。本主題においては1920-30年代という第三の時代においてオペレッタの拠点であったウィーン、ベルリン、ブダペストにおける人材の流動と越境的展開に着目する。またオペレッタに導入されたアメリカニズムについても文化的越境の観点から調査する。

4. 研究成果

本研究は、演劇学・音楽学・映画学・社会学の各分野の成果と方法論を射程に入れ、多角的な大衆文化論研究を推進することにより、従来の文化史研究の偏重を修正しようとするものであった。本研究の波及効果は、戦間期のドイツ語圏オペレッタの特質を徹底的に検証し定位することにより、ワイマール文化研究やユダヤ文化研究のみならず、文化史一般に新たな分析と評価の契機を提供した。研究成果公開は論文や実際のオペレッタ公演のプログラム解説として出版し、広く研究者の便宜に供するとともに一般にも還元した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 56
2. 論文標題 クレイジーなマドンナたちの変容	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 142-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 なし
2. 論文標題 ハプスブルク帝国の黄昏と『こうもり』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新国立劇場『こうもり』公演プログラム	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 なし
2. 論文標題 歓びと哀しみのオペレッタ：オッフェンバックから今日まで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京二期会オペラ劇場『天国と地獄』 公演プログラム	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 12月号
2. 論文標題 パリとウィーン、オペレッタの煌めき	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 44
2. 論文標題 ハプスブルク帝国末期のユートピア：ウィーン・オペレッタにおける多民族・多文化表象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 演劇研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 161
2. 論文標題 戦間期ベルリン・オペレッタの重層性：メロドラマ化と自己パロディ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 27-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.161.r27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川佐和子	4. 巻 13
2. 論文標題 ヴァイマル期ドイツ映画における「影」の主題系：「街路映画」と枠物語形式	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 層	6. 最初と最後の頁 84-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小川佐和子
2. 発表標題 初期ヨーロッパ映画におけるオペラ・オペレッタ・パレエのインターテクスチュアリティ
3. 学会等名 オペラ学研究会第61回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小川佐和子
2. 発表標題 誇大化するユートピア、放浪するノスタルジア：エメーリヒ・カールマンのオペレッタと第一次世界大戦
3. 学会等名 第209回オペラ研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川佐和子
2. 発表標題 映画・レビュー・オペレッタにおけるSF物：『月夫人』（1899）を中心に
3. 学会等名 第二回新生・共産圏アニメSF研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川佐和子
2. 発表標題 オペレッタにおける社会諷刺：ハプスブルク帝国期から戦間期の作品をみる
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「芸術と社会：近代における創造活動の諸相」研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小川佐和子他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 映画史の論点：映画の「内」と「外」をめぐる（分担執筆：失われた祖国、彷徨う自己：1920年代のフランスにおける亡命ロシア人映画pp.195-216）	

1. 著者名 小川佐和子、川成 洋、菊池 良生、佐竹 謙一他129名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 ハプスブルク事典 (担当項目: オペレッタpp.584-585、ハプスブルクと映画pp.626-627)	

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 中欧・東欧文化事典(担当項目: オペレッタ)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------